

第4回 宗門教学会議 開催報告①

宗教と平和

—武器なき平和の可能性—

二〇一五年十二月十六日、第四回・宗門教学会議が開催されました。本年度のテーマは「宗教と平和——武器なき平和の可能性——」。ご門主さまご臨席のもと、外部有識者として、古賀茂明氏（元経済産業省官僚）、小原克博氏（同志社大学教授）、小林正弥氏（千葉大学大学院教授）の三氏と、宗門から徳永一道氏（勸学寮頭）にご登壇いただき、各氏の専門分野からの提言と討議がなされました。

戦後七〇年を迎え、敗戦の記憶が薄れていく一方で、世界各地でテロや内戦が頻発しています。こうした状況下、憲法九条を掲げ平和国家を標榜する日本から、そして二五〇〇年前から「非暴力」、「不殺生」を教えの中核として説き続けてきた仏教から、平和について考え、平和のための実践を提案して、新たな平和のための一〇年の礎を築いていきたいというのが、今回の宗門教学会議の趣旨です。

本稿は、第一の提言を行っていただいた古賀茂明先生のご発題内容の記録です。

「宗門教学会議」総長あいち

宗門教学会議には宗門が当面する諸問題、宗門内外から提起される現在の課題、および宗務の問題等について、先端的知見を有する有識者から動向の科学分析と提言をいただき、宗教者の持つ知見が現代社会においてどのような位置にあり、よりよい社会の創造のためいかなる役割を果たしているかなど、宗門の活動の方向性を考えていく重要な会議として位置づけられております。

さて、本日のテーマは「宗教と平和——武器なき平和の可能性——」であります。戦後七〇年を迎えた二〇一五年、国家の安全保障と平和に関する国際的な貢献に関し、わが国は岐路に立っております。

私ども宗門と致しましても、この二〇一五年を迎えるにあたり、さまざまな平和活動を進めてまいりましたが、このた

び『宗報』十一月・十二月合併号、「平和に関する論点整理」という、平和問題をテーマとした資料を掲載致しました。この平和に関する論点整理中間報告は三つの柱からなっております。

一つ目は平和とは何か、仏教の目指す平和は何かということについて。二つ目は戦争・紛争の現実と、それに対する平和構築について。三つ目はそれらを踏まえて念仏者がいかに行動していくかでございます。論点整理はこれら三つの柱について問いを設定し、多様な意見を定義するといつかたちでまとめられております。

つまり、この資料はあくまでも論点整理であり、宗門の統一的な展開を示したものではありません。この論点整理の目的は、これを基に宗門全体の平和への意識を高めると同時に、平和について、具

体的な現実の状況について宗門全体で学びを深め、議論し、平和に向けて宗門全体で行動していくことにあります。

本日の第四回・宗門教学会議は、その論点整理中間報告を契機として始まる最初の議論、キックオフ・カンファレンスであります。議論が充実したものになるために、本日は平和に関するご見識が深い先生方にお集まりをいただきました。先生方におかれましては歳末お忙しいなか、ご参集をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。

戦後七〇年を単なる区切りの年とするだけではなく、ここから新たな平和に向けての活動を力強く推進していきたいと考えております。本日ここから、浄土真宗本願寺派の新たな平和への取り組みが始まっていくこと、ここから念仏者が平和を築く道が切り開かれていくことを、ここから念願し、開会にあたり私のあいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

発題 ①

日本を覆う不安

今、日本の人びとは何を考えているのか。もちろん日々の生活のことが大部分かもしれませんが、今起きている政治や経済のことをどう考えるのかについて、大まかに想像してみたいと思います。

戦後の歴史を振り返ると、だいたい一九八〇年代ぐらいまでの日本は、ずっと右肩上がりの時代が続きました。基本的

古賀先生からのご発題

に普通の人は、昨日よりは今日、今日よりは明日の方がよりよくなるという希望を持ちながら生きることができた時代でした。

一九九〇年代以降、いわゆるバブルがはじけ、こうした流れが完全に変わってしまいました。将来のことについて、特に経済の停滞が大きいため、これまでと

全然違う世界になってしまったという不安が出るようになりました。

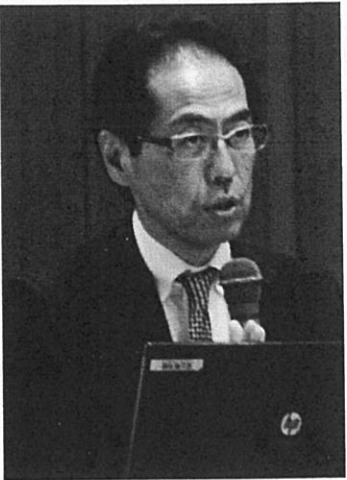
直近（二〇一〇年代）では、経済の不安とともに中国の台頭やテロ問題が起り、外交や安全保障など、さまざまな意味で不安がどんどん広がり大きくなる時代を生きています。それでもまだこんなはずじゃない、何かあるのではないかと、何かを求めているのが私たちの状況ではないかと思っております。

古賀茂明先生（元経済産業省官僚・フォーラム4提唱者）

一九五五年生まれ。東京大学法学部卒業。一九八〇年、通商産業入省。株式会社産業再生機構執行役員、内閣官房国家公務員制度改革推進本部事務局審議官を経て、二〇一一年に依願退官。その後、大阪府および大阪市特別顧問などを経て、現在、フォーラム4提唱者・古賀茂明政策ラボ代表。

【著書】

- 【原発がなくても電力は足りる！——検証！電力不足キャンペーン五つのウソ】（飯田哲也・大島堅一と共著、宝島社、二〇一一年）
- 【信念をつらぬく】（幻冬舎新書、二〇一三年）
- 【国家の暴走 安倍政権の世論操作術】（角川oneテーマ21、二〇一四年）など。



政治家の心理

ここに「自民党四つの大罪」を示しました。

一九八〇年代に「Japan as No.1」と言われていた残像がまだ日本にはありません。私は権力層がその残像にかなり支配されていると見ています。もう一つ日本を広く覆っている一種の神話のようなものですが、「アメリカは素晴らしい。アメリカは正義である」と、これも疑問を差し挟まれずに、今日まで生きてきた気がしています。これらの潜在意識に支配されているため、現実の変化に対して、政治がなかなかうまく対応できていないと思うのです。

今日不安視される大きな要素として挙げられる経済社会の問題のほとんどが、このような変化に立ち遅れた自民党政治の時代に起きてきたわけです。それを大きく四つに整理しました。

第一が、借金大国になってしまったこと。

自民党のなかからも、「こんな自民党では駄目だ」と飛び出した渡辺喜美さんなどは、みんなの党をつくりました。さらに、「もう自民党は駄目だ」と国民が見切りをつけたのが二〇〇九年の総選挙でした。そこで登場したのが民主党政権です。「自民党では全然駄目、民主党が期待の星」ということで政権交代が実現しました。

しかし政権ができてからすぐに「民主党って駄目じゃないの」という話になりました。民主党はしがらみがないと言われていましたが、実はしがらみをつくれなかっただけ、つまり権力に付いていなかった時代は誰も寄ってこなかっただけだったということです。

実際に権力に付くと、みんなが集まってくる。小沢一郎幹事長などが、「陳情があるのだったら、俺のところに来い」と言うと、最初に並んだのが農協、二番目が医師会だった。これは笑い話ではなくて、実際にそういうことが起きました。民主党はやはり自民党と同じになっ

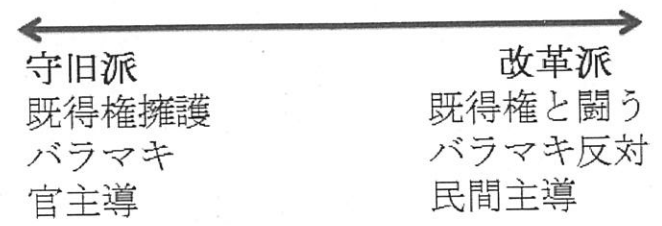
と。第二が、少子高齢化のこと。今、非常に騒がれていますが、実は三〇年以上前から始まっていて、これを放置して、社会保障の基礎が崩れてしまいました。第三が、日本が成長できない国になってしまったこと。そして、第四に深刻な原発の問題です。安全神話をつくって、あの福島事故のような、大きな失敗を犯してきました。

一九九〇年代からの対立軸 守旧派と改革派

「これではいけない、だから変えよう」「改革」という言葉ですと表されてきました。改革派をこの軸（四四頁下段）では右側に描いていますが、「既得権と戦わなければいけない、ばらまきは駄目、

く。しかも組合も付いていて、組合が全部悪いわけではないですが、その組合が付いていることによって、公務員改革ができないとか、あるいは電力総連がいるから原発を止められないというようなしがらみが、どんどん明るみになってきて、結局、「民主党駄目だね」となりました。自民党が駄目、民主党も駄目。そうなる、みんなの党や橋下さんの維新の党が輝いて見える、こういう時代がありました。維新とみんなが一緒になろうという話もありましたが、第三極はだんだんバラバラになります。東京の石原さんと橋下さんが一緒になったりしましたが、「何か第三極に期待したけどこっちも駄目だね」という閉塞状況に陥るわけです。国民はやはり何かを変えてほしい、何かないのかという期待だけを持っていますが、結局は次々に裏切られていく。こうしたなか安倍さんがまた戻ってきました。自民党はべつに何か特別なことをしたわけではありません。民主党がこけ、第三極がこけて、そして安倍さんの自民

1990年代からの対立軸



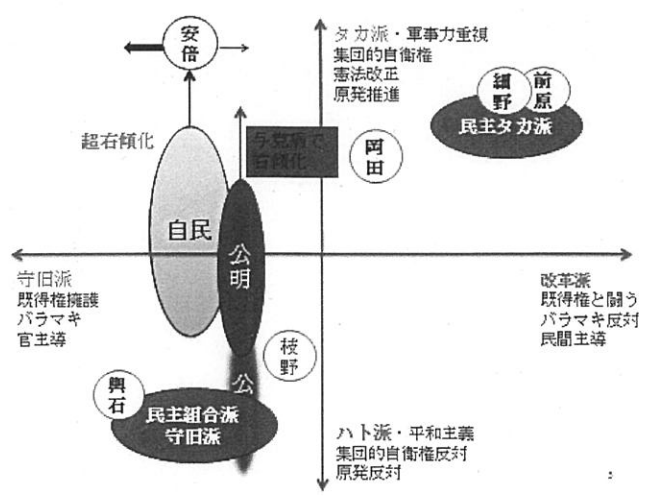
さらに民間主導でいこう」などという考え方がずつと主張されてきましたが、それはできないという人たちが自民党のなかには特に多かった。

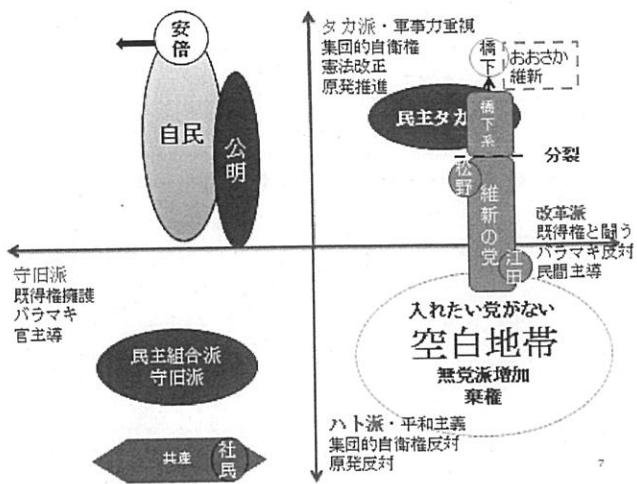
自民党も変えたいと言うのですが、実際には特に既得権グループと言われる農協・医師会・電気事業連合会・日本経済団体連合会などの癒着によって、なかなか変えられない時代が続きました。

党が戻ってきました。

対立軸の変化とタカ派とハト派

ここで非常に大きな転換が起きます。今までは、改革するかしないか、与野党とも自分たちが本当の改革派だと主張し争っていたのですが、安倍さんが出てきたらまったく違うことを言い始めまし





ばしているのです。それから社民党があります。社民党も本当は前回の選挙ぐらいでなくなると思いましたが、「戦争しないでくれ」という人たちの声を集めて、何とか生き残っているというような状況です。今回、関西では特に大きな話題になっていますが、橋下さんが維新を分裂させたというかたちになっています。この図

た。それが今日のテーマである集団的自衛権や憲法改正、原発推進の動きなど、非常に軍事力を重視するタカ派的な政策です。これが新しい対立軸になりました。縦軸で表していますが(四五頁下段図)、上軸がタカ派だとすると、当然それに反対するというハト派が出てきます。自民党は、改革はできないので左側の守旧派に入れているのですが、縦の軸では、タカ派とともに昔はハト派もかなりいたわけですね。それが、安倍さんがどんどんタカ派になっていくので、自民党も引きずられていくのです。でも一方、庶民が見ている安倍さんとは、アベノミクスで改革するぞという改革派。それから「集団的自衛権は戦争しないためにやっているのです」と述べ、それほどタカ派に見えないので、右の真ん中辺(タカ派改革派の中間)に輝いている安倍さんがいる。実際には改革と言っていますが、本当の安倍さんはかなりのタカ派で、しかも改革はなかなかでき

ない。一方でもう一つの与党、公明党です。最近影が薄くなっていますが、公明党はもともと平和の党でした。そういう期待を持たれていたのですが、とにかく与党でいなくてはいけない、与党でいたい。今回、軽減税率でも存在感を見せつけましたが、与党であるからバラマキができるので、結局、安倍さんにくっつき、どんどんタカ派的な政党に変わってしま

う。こうなると野党の出番。与党がどんどんタカ派になるのだから野党の出番だと思っ庶民がたくさんいるわけです。しかし民主党は、かなりの人たちが実はタカ派なのです。もちろん民主党にも改革派はたくさんいます。しかし、今の軸はタカ派・ハト派という対立軸に変わってきており、そうなるとう民主党にはタカ派が多かったというのがはっきりしてきました。ハト派もいますが、組合中心のいわゆる左派と呼ばれる人が多いです。こ

(四七頁上段)で示したように、右側の改革をしっかりとやるという方向性でありながらハト派である。改革はするが戦争はしない。ここが非常に空気になっているわけです。そういう有権者の受け皿がないため、結果的に無党派が増え、選挙をやると棄権が多いということが起きているわけです。

フォーラム4を唱える理由

つまり今、庶民が考えているのは、日本を何とかしてほしい、何か変えてほしい、改革してほしい、こういう気持ちですが、一方で、今までの平和主義はしっかり守ってほしいということです。改革をしてくれそうな維新も民主も、かなりタカ派に行ってしまうのではないかと、戦争に行ってしまうのではないかと、憲法改正を行ってしまうのではないかとという不安があるので、なかなか安心して投票できる政党が見つからない。こういう状況に陥っていて、そこに政治が対応できて

の人たちは、どちらかというときあまり改革に熱心ではないので、左下の方に見えるのです。

第三極の動向

第三極——みんなの党や維新なども、結局「改革」にはまともまっているのですが、タカ派とハト派で分裂していくということが起きます。結いの党は、みんなの党からリベラル派が分党してできたのですが、維新と一緒にしたので、何のために分かれたのかということになります。その新しい維新もまた今、分裂劇になりましたが、その原因は、タカ派の維新とリベラルの結いがくっついたためです。

ハト派で安心して入れられる政党はない。そこに出てきたのが共産党です。共産党は今、勢力を拡大していますが、有権者から見ると、与党・野党ともに共産党以外は「戦争しない」という点で信頼できないので、共産党は非常に勢力を伸

安倍総理の思惑

いないと思うわけです。私はこの場所に、新しい政党をつくってほしいということ、で、「フォーラム4」という市民活動を始めています。フォーラム4とは政党ではなくて、「改革はするが戦争はしない」という、非常に明確な政策の軸を掲げた政治勢力をつくれないうことだと思っています。

私たちがから見ると政治がどうも対応していないと見えるわけですが、安倍総理が今進めている政治は、支持率が結構高い。でも、そこはかなり市民がだまされているのではないかとというのが、私の仮説です。

安倍さんは何をやるうとしているのでしょうか。普通一国の総理大臣であれば、その国の国民を何とか豊かにしたい、仮に野心があるとしても、国民からあがめられるようなリーダーになりたい。こうした発想になるのではないかと思います

が、安倍さんの考えることというのとはかなり違うと思うのです。もちろん人の心のなかは見えませんが、安倍さんが何を考えているかを私が断定することはできませんが、安倍さんは今いろいろなことを進めています。

列強になるための「三本の矢」

ここに一覧表（四八頁下段）で三項目示しました。実際に行われていることがたくさんあります。すでに「国家安全保障会議」をつくり、「特定秘密保護法」を施行しました。それから武器輸出を解禁し、集団的自衛権の行使を容認しました。集団安全保障は、まだ明確には出ていませんが、今いろいろ進めている議論は、ほとんどそれが入ってきている状況です。

また、「産めよ増やせよ」と言っている出生率1・8%を目指しています。これは国の人口を維持、拡大するという政策です。強大な軍事力を行使するための大前

提として必要なことです。

七番目のODA（政府開発援助）は、経済協力を軍事に利用しようということですが、正式には出ていませんが、さすがに経済協力で武器輸出はなかなか言いにくいので、中古の武器をただで供与するなどの別の枠組みを進めています。

そして八番目以降の日本版CIA創設や国防軍保持規定、基本的人権の制限などは、自民党が出した「日本国憲法」改正草案のなかに全部入っています。

今のところ、徴兵制と核武装は一番下にあります。これはやらないと安倍さんは言っています。実際には、私はやるだろうと思います。例えば一〇年以上前ですが、安倍さんは「憲法上、原子爆弾だって問題ない。小型であれば」などと意味が分

【列強になるための「13」本の矢】

- ① NSC法（国家安全保障会議）
- ② 特定秘密保護法
- ③ 防衛装備移転三原則（武器輸出の解禁）
- ④ 集団的自衛権行使容認（安保法案）
- ⑤ 集団安全保障
- ⑥ 産めよ増やせよ政策（出生率1.8）
- ⑦ ODAの軍事利用
- ⑧ 日本版CIA創設
- ⑨ 国防軍保持規定（憲法9条改正）
- ⑩ 基本的人権の制限（憲法12条、21条などの改正）
- ⑪ 軍法会議（憲法9条改正）
- ⑫ 徴兵制（憲法改正または解釈改憲）
- ⑬ 核武装（憲法改正または解釈改憲と原発推進・核燃料サイクル維持）

からないですが、そういう恐ろしいことを言ったりしています。

安倍総理が目指す美しい国とは？

こういうのを見ると、安倍総理は今までの総理とは違うと私は理解しています。それを各言葉から推察するヒントとして、一つ目は、今年の通常国会の施政方針演説で安倍さんが発した言葉です。これは冒頭に出てくるのですが、岩倉具

視の言葉を引用します。まず引用前に

「近代化が進んだ欧米列強の姿を目の当たりにして、岩倉具視がこう述べました」と状況を説明しています。そして欧米の列強を見ながら岩倉具視が「日本は小さい国かもしれないけど、国民みんなが心を一つにして国力を盛んにするならば、世界で活躍する国になることも決して困難ではない」と述べたことを引用し、さらに自身の言葉として、「明治の日本人にできて、今の日本人にできないわけがありません」と述べています。つまり、明治時代に欧米の列強に後れを取った日本はそこを目指していく、これが理想の姿だとはっきり言っているのです。「列強」という言葉をわざわざ使ったところに、私は驚きましたが、そういうイメージが安倍総理の頭のなかにあるのでしょうか。

それから戦後七〇年談話のなかには、「日露戦争は植民地支配の下にあった多くのアジアやアフリカの人びとを勇気づけました」という表現もあります。要す

るに、欧米列強に後れていた非白人の小さな島国が、当時一大帝国主義の一角を占めていたロシアを破り、「素晴らしいですね」とアジアの人は喜んだと。これを出したときに中国や韓国はものすごく反発しましたが、安倍さんの頭のなかには、こうした発想があるのです。

ISILによる日本人拘束事件と安倍首相の動向

このように常に「列強」を目指しているというのが頭のなかにあるのだと思います。そして私がそれを非常に確信したのは、今年（二〇一五年）一月の後藤健二さんの人質事件の際です。あのときに私が驚いたのは、二〇一四年一月ないし二月には、後藤さんが捕まり身代金が要求されているなどの状況について、安倍さんは全て分かった上で中東を歴訪したことです。訪問国としてエジプト、ヨルダン、イスラエルなどのアメリカの同盟国・盟友を選び、イスラエルまで入



2012.12.21. W&A記事 サンデー毎日（2002年6月23号）引用

れました。しかも「イスラム国と闘う周辺各国に二億ドルの支援を行う」という演説までして、ほとんどISILに宣戦布告をするようなことをしている。後藤夫人がISILと交渉しているのに、まったく政府は関与せず身代金交渉を無視しました。そして対策本部をトルコに置けばいいのに、置かなかつた。トルコはISILと裏でパイプがあるともともと疑われていたのですが、逆に言えばそれだけ交渉に使える国だったのです。しかし、なぜかトルコではなくヨルダンに対策本部を置いた。ヨルダンはCIAの拠点があり、アメリカに全部情報が筒抜けになる、アメリカに監視してもらうということなのです。これを見たときに、安倍さんは後藤さんが死ぬか生きるかまったく何の関心もない、むしろ死んでもいいと思っているのではないかとというぐらいに私は思ったのです。

こんなことをして何の意味があるかという、アメリカに全てを監視されるなかで、人質を取られているという非常に「安保法案」は危ないと言われたけど、それが通った後も何も変わっていないです。大丈夫、安心してください、それより大事なことは経済ですという宣伝を、非常にうまくやっています。

これはヒトラーなどの人たちが独裁に進んでいくときの非常に重要なステップで、ニンジンをおろして、何となく景気がいいぞと浮かれさせ、知らないうちに独裁、戦争へと持っていく。そういう歴史が非常に今、思い出されるわけです。これはすごくコントロールされたかたちで行っていて、日本の国民はすぐだまされているのです。

I am not ABE

「I am not ABE」は、私が三月に報道ステーションで出した紙で有名になりましたが、実は、一月の安倍総理の中東訪問の際に、最初にこの言葉を提起しました。安倍さんの行動は、日本では何となくだませている感じがするのですが、世

危ない状況でも、わざわざ中東に行きイスラエルを訪問して、ISILと戦うぞと言えるリーダーであることを示すためです。これはアメリカから見れば、絶対ぶれない珍しいリーダーだということになります。例えばフランスやイタリアにしても、ISILに人質を取られました。全部身代金を払って返還交渉を成功させて、みんな戻ってきているのです。アメリカ、イギリスなどは、それを拒否したので殺されましたが、要はアメリカに対して日本はイギリス並みに信頼できる盟友ですよ、絶対にぶれませんよと高らかに宣言したと思っています。こうした一連の言動から、私は安倍さんというのは、「列強」のリーダーになりたいと考えていると思ったわけです。

経済という名のバラマキ

これだけの危ない路線を進めている安倍政権ですが、それでも支持率は高いのです。やはり非常に情報のコントロール

界にどういう印象を与えているのか。特にあの後藤さんの事件と重なったことで、「日本は新しい段階に入った」「平和主義を捨てた」など、平和主義をとっていた日本の外交政策が大きく転換されたと、多くの国で報道されています。今まで「日本は戦争をしない、武器を輸出しない」と言っていたものを、ア

I am not ABE

がうまい。例えば今年(二〇一五年)九月に「安保法案」が通った後、何をやっているかという、徹底したバラマキに入っています。これは市民のこころを非常によくつかんでいて、市民は日々の生活の方に関心がある。「安保法案」は非常に反対運動が盛り上がりましたが、終わった後、日々の生活に目を向けさせてしまえばそちらの方が関心が高い。軽減税率もあるし、貧しいお年寄りに現金三万円ずつ配る、TPPという理由の下に農業予算三千億円のバラマキなどをどんどんやっていけば、きっと忘れるだろうと。

忘れさせるためのもう一つは、南スーダンにこの春から駆けつけ警護や新しい任務を負った自衛隊などが六月に交代します。それに伴って任務の追加でしょう。防衛省のなかでも着々と進んでいたのですが延期しました。また、南シナ海で米軍と一緒に警戒活動を行うのかと聞かれると、「そんなことを今考えてはいません」と答えています。

リカや西側諸国と一緒に戦争もするし、武器も輸出する国が変わっていくのだということが、広く世界中に流布されました。

このイメージが変わるといえるのは、日本にとっては非常に大きなダメージになると私は考え、それで「I am not ABE」と言わなくてはいけないと思ったのです。つまり安倍批判が目的ではなくて、世界に対する発信として、「日本は安倍さんが考えているような路線を取りたいわけではありません。日本の一般の市民はそうじゃないのですよ」ということを発信したいと思い、紙を出して訴えたわけです。だから、日本語ではなく英語だったのです。

平和について

今日は「宗教と平和」というテーマで、議論がこれから行われます。「平和に関する論点整理」を何回も読ませていただき、線を引っ張っているうちに真っ赤に

なってきたしまったぐらい、非常によく整理された面白い論点整理だと思っています。しかも、私の考えていることと、かなり近いと思います。

平和について普段から考えていることなかで皆さんにお伝えしたいと思ったことは、平和というのは本来にあるのだろうかということ。今は戦争の映像というのが溢あふれています。中東やアフリカ、中南米でもそうですが、至るところで毎日のように戦争や内戦などがあつて、毎日何人も死んでいる。そしてその映像は見ようと思えばいくらでも見られるという時代です。ですから、戦争を知らない子どもたちと言っていますが、実はそんなことはなくて、こんなに戦争の怖さを分る時代はないのではないかと思います。そして一方で、戦争はものすごく日常的なものになってしまったという、ちょっと逆説的な面もあります。

何とか平和に近づけないのかと努力し続けるのが、本当の意味の平和主義であると思います。

「積極的平和主義」と安倍さんは言いますが、私に言わせれば、平和を求めているというのは一応本当だとしても、それを求めていく方法が、安倍さんの場合は主たる方法が軍事力であるという意味では、積極的軍事主義にすぎないと感じています。

宗教者への要望

最後に一つ、私が皆さんに宗教家として、ぜひ考えていただきたいと思うことを述べます。

宗教家であつても人間ですから、必ず過あやまちを犯すわけです。それで真面目に考えれば考えるほど、間違いを犯すかもしれないと過あやまちに對して非常に慎重になるというのには分かります。ですが、過あやまちを避けるために行動しないということも過あやまちかもしれない、ということ考

人間の不完全さ

もう一つわれわれが考えなくてはいけないのは、物質的にもすごく豊かになつていてということ。歴史上、一番豊かになつていながらもかわらず、でもやはり戦争は起きるのはなぜなのかということ。これはやはり人間が生きものである以上、「まず自分を守ろう」という本能があります。それがだんだん拡大すると、結局、自分を守るためには戦争は仕方がないのだという論理につながっていきます。さらに、守るためには相手が攻めてくる前に相手を叩かなければならないとエスカレートしていくのです。しかも人間というのは不完全なので、その過程で必ず間違つた認識をしてしまう。戦争しているとき、双方とも「自分が正しくて相手が悪い」と信じているのが何よりの証拠です。この世界に人間がいるということ自体で、もう絶対に平和は来ないの

えてもらいたいと思います。何が大事かという、本願寺としてこうあるべきだとか、本願寺として政治的にはこう発言すべきだとかすべきではないとか、いきなりそういう議論を目指さなくても、一人ひとりが何を感じ、何を考えているのかということ、まず自分の責任で言葉にする、あるいは行動する、またはしない。それを自分の責任でやることを考えていただきたいのです。

もちろん、みんなの意見が総意でまともれば、本願寺派はこうですとなり。例えば「安保法案」反対や、そういうのを宣言するというのは、一つの考えとしてはあるかもしれませんが、それができれば素晴らしいことでしょう。でも、その前に、私は一人ひとりの考え方を、ぜひ勇気を持って出していく。そしてもちろん間違つたら、それをちゃんと認めて修正していくというようなことをやっています。組織に頼るのではなく、一人の人間としてこの問題に真摯しんしに向き合うとい

ではないかと私は思っているのです。そういう矛盾は最初からあつて、しかもそれを解決することは永遠にできないと求めているのですが、それでも平和を求めていかなければいけない。つまり、平和とは、この論点整理のなかにも出ていましたが、僕は絶対に平和というのはないんだ。平和という状態というのはないし、それを実現することは、われわれが人間である限り、できないということからスタートすべきではないかと思うのです。

平和を求めていく二つのプロセス

ですけど、それでも平和を求めていくというプロセスが平和主義なのではないか。そしてそのプロセスが、二通りあると思うのです。「武力によって平和を求めていく」というプロセスと、「それになるべく使わないで平和を実現していく」というプロセスです。その二つのうち、とにかく武力をなるべく使わないで

う意味があるからです。

そしてもう一つ、考え方はいろいろ違うかもしれませんが、他の宗派とか、あるいはキリスト教などの他の宗教も含めて、ぜひ宗教家同士の連帯を模索もさくするよう努力をやっていただけなのかと思いました。

時間がなくなりましたので、取りあえずこの辺にさせていただきます。ありがとうございました。

※次回は、小原克博先生のご発題についてご報告します。

(本願寺派総合研究所 教団総合研究室)